2024年度(令和6年度) 大阪暁光高等学校 学校評価

1、めざす学校像

学校法人千代田学園の始まりは、真言宗盛松寺住職の故高橋道雄師が、第二次世界大戦後の荒んだ世相を憂いて、庶民のために学問所を開いた弘法大師空海 (774-835 年)の偉業に倣い、1950 年に千代田高等学校、附属幼稚園を開設したところに遡る。弘法大師は、身分や貧富にかかわりなく門戸を広く庶民に開放し、あらゆる思想・学芸を総合的に学ぶことができる私立学校「綜芸種智院」を創設(829 年)し、そこで多くの前途有為な青年を育てようとした。本学園は、この精神を受け継いでいる。

「人間教育」を建学の精神として、若い世代に豊かな人間性を培うとともに、平和で民主的な社会の形成者として必要な知識、教養と、それに基づいた技術を教授することにより、社会や地域を支え、また支えられる人間を育成することを基本的な考え方としている。その具現化として、本校は、社会的共通基盤を担う教育、福祉、医療など対人援助職の分野を指向する若人を輩出する学園づくりを大きな社会的ミッションとしている。本校は、これまで積み上げてきた一人ひとりが自らの人生の主人公として生きる力(主権者教育)の成果を土台としつつ、志や目標を持って入学してきた生徒とその保護者の期待に応えていくための教育の創造に全力で取り組んでいく。

2、中期的目標

- 11.「人間教育」を理念とする普通科の魅力を創出する教育実践を行う。
- (1)普通科の新コースである教育探究コース、幼児教育コースの教育内容を完成させていく。
- (2)「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめていく。
- (3)特別活動を教育活動にしっかり位置づけ、自治の力を育んでいく。
- (4)社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめていく。
- (5)特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートしていく。
- (6)生徒の発達可能性を信じて諦めない指導を続け、転退学者を減らしていく。
- 2.系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。
- (1)1年次は"職業"、2年次は"学問"をテーマに卒業後のキャリアを考えさていく。
- (2)年間教育活動の中で、進路実現につながる多様なサポートをすすめていく。
- (3)併設短大への内部進学希望者を増やす。
- |3|. 基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師の育成を目指す。
- (1) 命と向き合う職業に就く者としての自覚と誇りを育てていく。
- (2)看護専門科目と普通科目を共に重視し、基礎学力の向上を諮っていく。
- (3) 将来、医療現場でチームとして働くことを考え、チームで責任を果たせる力をつけていく。
- (4) 就職活動、臨地実習、国家試験の受験学習を両立して取り組ませ、国家試験 100% 合格をめざす。
- 4. 高校を支える諸組織や地域との連携を強め、地域社会に貢献する。
- 5.部活動を活性化させていく

3、学校関係者による評価

【学校アンケートの実施】

教育活動の現状や問題点を確認・点検し、教育改善のための方策を明らかにする目的で、2024年10月に学校アンケートを実施した。

アンケートは、【A.そう思う、B.どちらかと言えばそう思う、C.どちらかと言えばそう思わない、D.そう思わない、E.わからない】の 5 択でおこなった。()内の数値は、「A. そう思う」「B.どちらかと言えばそう思う」を合算したものである。調査回答は、在校生**657名(昨年度 645 名)**、保護者**433名(昨年度 445 名)**である。

❖数字は、[そう思う]+[どちらかといえばそう思う]の合計

◆()内は昨年度との比較である。

■校長の評価

1)、学校教育全般の評価

- *最も重視すべき項目である「<u>この学校に入学してよかったか」</u>に対する保護者の肯定的な回答は、**85.5%(前年比+3.8)**と高く、本校の教育が保護者から高い信頼を得ているものと評価できる。一方、生徒の回答は**71.9%(前年比+7.4)**と、70%台にとどまっている。数値が低いのは看護科である。看護科の場合、厳しい実習を含む専門的な学びが求められることに加え、進路が一本道であることから、「本当にこの道(この学校)でよかったのか」といった迷いが生じやすい。しかし、困難を乗り越えて専攻科に進学して看護師国家試験に向かう生徒については、逆に満足度が100%に近くなっていると推察される。
- *評価が高かった項目としては、「特色ある授業」と、「学校行事」「施設環境」があげられる。とりわけ、看護科・探究コース・幼教コースを対象とする「特色ある授業が行われているか」という設問に対しては、生徒89.6%(前年比+0.9)、保護者93.7%(前年比-2.3)と、いずれも非常に高い評価を得ており、入学時の期待に応えられているといえる。本校の看護科と幼児教育コースの堅調な生徒募集は、この「特色のある授業」が背景にあると考えられる。しかし、「特色ある授業に満足しているか」という設問に対する生徒の回答は、満足度77.1%(前年比-1.6)にとどまり、大きな隔たりが見られる。この結果も、看護科の授業内容や実習の困難さが影響しているものと考えられる。

2)、学習指導、進路指導

- *授業改善を教育課題として位置付け、「問い」と「対話」を重視した授業実践を方針に掲げて2年目を迎えた。学校アンケートにおいては、「授業がわかりやすいか」との回答が66.7%(+5.2)、「授業中に深く考えたり、意見を述べたりする機会があるか」が58.9%(+2.9)、「学力がついてきたと実感できるか」が61. 7%(+7.0)と、いずれの項目でも評価が向上している。授業改善に向けた取り組みが一定の成果を上げていると考えられ、今後も方針を継続していくことが重要である。
- *「<u>自分から勉強しようという思いが大きくなったか</u>」の項目では、肯定的な回答が生徒**58.3%(+4.4%)**と年々下降している。実際、KG週間にしか家庭学習をしない生徒が増えている。学ぶ意欲が育つ授業づくりを進めるとともに、学びに向かう姿勢(意欲)を育むクラス活動の展開が求められる。
- *学習規律に関しては、「<u>授業時間と休憩時間のメリハリがあるか</u>」の項目について、肯定的な回答した生徒が**45.4%(+3.3)**、「<u>授業妨害を先生がしっかり指導しているか</u>」では**53.3%(+5.4)**と、2023年度より改善が見られた。授業中と休み時間の区別は1年生で最もよくできており、学年が上がるほどその傾向が薄れている。授業空間を「自分の学習権と他者の学習権をともに尊重する学びの場」として確立することは、依然として大きな課題である。また、この項目にはクラス間でのばらつきが見られる。学年やコースごとに具体的な方針を持って対応していく必要がある。
- *3年生を対象にした「希望する進路を実現するため丁寧な指導がされているか」という項目では、生徒の肯定的評価は**69.2%(-0.7)**でほぼ変化がなかった一方、保護者の評価は**58.5%(-17.5)**と大きく低下した。この差から、進路指導における学校と家庭との連携や情報共有が十分でなかった可能性が考えられる。今後は、保護者との連絡・相談体制の強化が必要であるといえる。
- *進学総合コースと教育探究コースを対象とした「1年生から進路を考える機会が作られているか」の項目は、1年生**71.9%(+7.8)**、2年生**49.5%(-12.6)**、3年生**59.5(+5.9)**と学年によって評価に大きな差が見られた。高校教育において、卒業後の進路決定は重要な柱である。1年生の評価が上昇したのは、『総合的な探究の時間』に進路指導をしっかりと位置付けて取り組んだ成果が反映されたと考えられる。一方で、2年生の評価が大きく下がった点については、進路に対する意識づけが弱かった可能性がある。今後は、1年次から3年次までを通じて「なりたい自分」を見つける進路支援のプログラムを系統的にすすめていくことが求められる。

3)、人権·生活指導

- *「命や人権を尊重し、差別を許さない教育が行われているか」と回答した割合は、生徒が67.2%(+0.2)、保護者が65.0%(-6.0)であった。また、「暴力問題 やいじめが起きたときに適切な指導が行われていると思うか」と答えた生徒は58.8%(+1.4)であった。本校は建学の精神に「人間教育」を掲げ、命と尊厳を 何よりも大切にする人間の育成を目指している。今後もこの理念に基づき、指導のさらなる充実を図っていきたい。
- *「4月以降いじめを受けている人がクラスに存在したか」との項目に該当するクラスが、1 年で4クラス(5クラス)、2年で3クラス(3クラス)、3年で2クラス(7クラス)存在した。いじめが発生している可能性を常に念頭に置き、早期発見に努める必要がある。いじめ事案については「いじめ対策基本方針」に則って迅速に対応していく。

4)、特別活動・課外活動

- ❖「学校行事に楽しく参加できているか」の項目では、生徒75.3%(+4.3)保護者81.0%(+3.5)と、いずれも高い満足度を示している。一方、「生徒会活動や クラス活動は生徒主体のものとなっているか」については、生徒63.8%(+6.0)にとどまっており、今後は生徒がさらに主体的に取り組むことができる場としていきたい。
- *部活動に関しては、「<u>キャプテンや部長を中心に生徒が運営できている</u>」と回答した生徒の割合は**66.8%(-1.3)**であり、概ね生徒の主体性が発揮されているといえる。引き続き「クラブ活動に関する方針」の目的に沿った活動となるよう指導していく必要がある。

5)、教育環境

- *「<u>施設設備に満足しているか</u>」の項目は、生徒**77.3%(+5.3)**保護者**82.9(-3.4)**、「<u>校内美化が行き届いているか</u>」は**82.4%**と、教育環境面での満足度は高い。これらの結果は、施設グループの職員の日常的な努力の成果といえる。
- *「<u>制服(デザイン着やすさ)に満足しているか</u>」は生徒**68.6%(+3.0)**保護者**83.6%(-1.2)**と保護者に特に高い評価を得ている。「<u>食堂のメニューや味付けに満足しているか</u>」の項目は、生徒**61.6%(-9.9)**と、改善の余地がある。

6)、その他

- *「<u>先生は生徒の人格を大切に指導しているか</u>」の項目は**65.5%(+4.1)**であり、「子どもの権利条約」の理念を重視する学校としては、低い数値にとどまっている。今後、改善に向けた取り組みが求められる。
- *「<u>悩みがある時に安心して担任に相談できるか</u>」は、**57.7%(+1.0)**と高くない結果となった。アンケート結果は学級ごとに集計されており、このような重要な項目においても大きな差異が見られる。担任の個性や指導力の違いがあることを前提に、学年やコース全体での組織的な対応が求められる。

【学校関係者評価委員会】 2025 年 10 月 25 日に開催

委員長 玉崎和実様 (河内長野市社会福祉協議会会長・学園理事)

評価委員 河野直明様(社会福祉法人コスモス元理事長・学園監事)坂田臣織様(楠小学校校長)葛目巳恵子様(大阪暁光高校同窓会会長・学園評議員) 佐野知様(2024 年度大阪暁光高校 PTA 会長)宮坂政宏様(桃山学院大学教育学部講師)

■学校評価委員の意見

- *「わからない」と回答する生徒の割合が他校と比較して高い。回答に迷っている以外に、アンケートへの参加拒否や、主体的に考える姿勢の欠如面倒、自分の考えを表明できないなど、複数の背景が考えられる。少なくとも、設問に前向きに取り組み、自分なりに価値づけをして答えを導き出す姿勢の育成が求められる。
- *授業全体の評価は悪くないものの、授業ごとに評価が分かれる傾向がある。「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」とする生徒も一定数存在する。改善策として、 高評価の授業担当者による研修やグッドプラクティスの共有が有効と思われる。学びから離脱する生徒への指導は困難だが、「やればできる」「自分から勉強しよう」と思 える生徒が増えていることは強みではないか。教員の目標と生徒の到達度に乖離がある場合は、授業内容の精選などでその差を縮める取り組みが必要と思われる。
- *授業内容に関して 60%以上が高評価を示し、昨年度より向上している点は大きな成果である。一方で、授業が「わかりにくい」と答えた生徒は、意見表明・落ち着き・教員 評価の面でも低くなる傾向があり、背景分析と継続的な対応が必要である。
- *アンケートや自由記述から、授業中に落ち着いて学べない状況が指摘されている。さらに、「きちんと指導されていない」と感じている生徒が約3分の1存在する。学習規律の不全は、他者の学習権を損なうとともに、自身の権利を放棄していることにもなる。自分自身にとっての学びの意味、他者への配慮、そして人権意識の徹底が重要ある。
- *「先生がしっかり指導している」との項目では昨年度より改善傾向にあるが、「そう思わない」とする回答が特定のクラスに偏っていないか、また、その教員の孤立が起きていないかなどの懸念がある。
- *特色ある授業の実施について、全体的な満足度は高いものの、「そう思わない」とする生徒の背景分析が必要である。
- *特別活動・課外活動に関して、活動成果は良好だが、「主体性」の意味を再考する必要がある。単なる自由や放任ではなく、創造的・探求的に目標へ向かう姿勢、協働におけるリーダーシップ・パートナーシップ・メンバーシップの発揮が求められる。これらは人権意識に基づいた自己理解・他者理解に立脚するものである。
- *学校行事に対する評価は高く、「楽しみ」の価値理解と、さらに奥深い楽しみへ創造的に取り組まれることが期待される。一方で「楽しくない」とする生徒の背景には、プログラムへの不満、居場所の欠如、参加意欲の低下、人間関係の問題などが考えられ、教育活動改善のヒントとなる可能性がある。
- *「学ぶ文化祭」は難しい取り組みであるにもかかわらず、生徒の肯定的な評価が多く、教員の指導と生徒の努力の成果と考えられ、他の教育活動への波及が期待される。 否定的な意見も一定数あるため、背景分析が必要である。
- *クラブ活動について、自治的な運営が積極的にすすめられていることは素晴らしい成果である。ただし、運営の中で生じる葛藤や軋轢へのケアは今後の課題となる。
- *進路指導について、2 年生の 27%が進路に関して否定的な評価をしており、肯定的な回答が半数に満たない状況である。指導は行われていると考えられるが、生徒に届いていない可能性があり、認識のギャップを埋める工夫が必要である。
- *施設・設備・美化・食堂・制服について、数値的には良好だが、不満を持つ生徒が「理解はできる」と納得感を持てるような方向性への工夫が求められる。
- *人権を大切にした生徒指導という点で、2年生の評価がやや低く、教員不足が背景にある可能性がある。
- *「いじめや体罰」に関するアンケート結果は、この学校の特筆すべき成果だ。建学の精神である「人間教育」は、看護師として活躍する卒業生が、就職先の病院で「患者の 立場に立ち切る姿勢」を高く評価されていることに繋がってると思われる。
- *いじめや人権侵害(自己に対するものも含む)はゼロディフェクトを目指す必要がある。
- *「担任に相談しやすいか」の評価が低い背景には、教員ごとの対応の差があり、生徒に寄り添う姿勢が不足している場合がある。学校ではアンケート結果をもとに教員への面談や指導を行っており、新任教員には学校の理念を丁寧に伝える必要がある。
- *服装の乱れの指導について、地域の声も活用して生徒に考えさせるといいのではないか。
- *看護師・保育者をはじめ、夢の実現について数値的には良好であり、生徒が将来を具体的に設計し、積極的に取り組む姿勢が見られる。理想と現実のギャップに悩むことなく、現実を踏まえた夢の実現を支援する必要がある。職業適合性理論(D.E.スーパー)や興味の 6 分類(J.L.ホランド)などの理論も参考になるのではないか。
- *「やればできると実感」「自分から勉強するようになった」の項目について、自己肯定感が低く、学びから離れていた生徒が、やる気を持ち学びに向かうようになったことは 大きな成果である。できていない生徒について背景分析を行うことで、教育界への貴重な示唆となる。
- *「入学してよかったか」について、1 年時の評価が継続されることが望ましいが、学年が進むにつれて不満が出る傾向がある。どのような点で不満に転じるのかを分析し、 対応する必要がある。
- *保護者からは、懇談会が開催されていないことにより、学校内での子どもの様子が把握しづらいという声が複数寄せられている。特に、成績に問題のない生徒や、家庭で学校のことをあまり話さないタイプの生徒については、保護者が学校生活の実態を知る手段が限られており、子どもを介した情報のみでは不十分との不安がある。背景から、懇談会の開催方法や頻度、懇談会以外での情報共有手段の有無、また来校が難しい保護者への対応などについて、改善が必要ではないか。
- *「無駄なものを買わさないで欲しい」との声があるが、すぐにでも改善できるものは改善すべきである。
- *地域との連携が深まり、挨拶や学習姿勢を見せる生徒の姿が小学生にとって良い手本となっている。地域の方々からも「暁光があってありがたい」との声が寄せられ、生徒自身が地域の中で役立っていると実感できる点に教育的意義がある。

4、本年度の取り組み 及び 自己評価

今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	 評価の指標	総 括・自 己 評 価
_ (1)開設 5 年目の普通科幼児	■幼教コース	・学校アンケート	
引教育コースと探究進学コース普の充実を図る通	「大阪暁光高校にしかない未来の保 育者になるための特別な高校生活」 の実現をはかる	・特色あるカリキュラ ムの実施回数	・「 <u>特色ある授業が行われているか</u> 」という設問に対しては、 生徒89 . 6%(前年比+0.9)、保護者93.7%(前年比-2.3) と、いずれも非常に高い評価を得ており、入学時の期待に応えられているといえ
科	の美塊をはかる ①学年ごとの目標を明確にする。		న <u>ి</u> .
日の魅力を創出する人間教育の	②教科活動、並びに生徒会・HR 活動・学校行事を展開する。 ③高短5年一貫教育あり方会議、幼児教育コース会議を充実させ、高短のカリキュラムの連携と検証を行う。 ④生徒・学生・教職員の人的交流、並びに、教育実践の交流を図る。		○1年生は入学 2週間目からこども園での「放課後遊び体験」を始め、12月には「クリスマスコンサート」を実施した。2年生は7月に「夏祭り実習」とこども園・保育園での「半日保育実習」を実施。3年生は夏休みに2日間の「外部保育実習」を希望者対象に実施。生徒たちは園児たちと生き生きと関わり、子どもや教員の指導についての多くの気づきを得ることができた。 ○「高短 5年一貫教育あり方会議」を定例化し、時々の課題について検討することで連携を円滑に進めることができた。生徒情報の共有もすすめることができた。 ○幼児教育カリキュラム検討委員会を設置し、5年間で育てるべき保育者像を「千代短マインドを持つ保育者」と定めた。高校3年間で育むべき資質・能力について検討し、3年間のカリキュラムを策定することができた。
前進 ②キャリア教育の#			「ちよたんマインド」(大阪千代田短期大学ホームページより) (1) 協調性 子どもの人格を尊重する姿勢と感性を持ち、子どもとその家族に寄り添い、地域・家族を支援する力、協調性を備えた保育者の養成。 (2) 科学的認識 子どもに関わる専門知識に基づいた保育内容や援助方法についてよく理解し、現代社会と人間についての科学的認識に裏付けられた保育者の養成。 (3) 豊かな表現力 変化する時代に対応し、現代社会の要請に応えられる力、子どもの能力を 多面的に育む豊かな表現力を備えた保育者の養成。
推 進 と 進 路 実			○高校1・2年生対象に「千代田短大訪問」を実施し、短大生の体験を聞く機会を設けた。3年生の大阪千代田短期大学への進学者は48名。うち幼児教育コースからの進学者は47名で、初めて内部進学率が75%を超えた。高校教員が短大の魅力を的確に伝えられるようになったんど、高校と短大の連携強化が内部進学者の増加につながったと考えられる。
現			○教育実践、教育内容の交流では、夏期校内教育研究会に短期大学 から教員の参加があった。
	■探究コース	・学校アンケート・特色あるカリキュラ	・「 <u>特色ある授業が行われているか</u> 」という設問に対しては、 生徒89 .
	①「人・社会」②「地域」③「多文化多様性」の3つの探究エリアを学ぶ。	ムの実施回数	6%(前年比+0.9)、保護者93.7%(前年比-2.3) と、いずれも非常に高い評価を得ており、入学時の期待に応えられているといえる。
	②『探究』の授業を通して、多様な体験を重ねながら、自ら課題を見つけ、調べ、意見をまとめ、発表し、		○コース全体として、フィールドワークやゲストスピーカーから学ぶ活動を活発に行った。
	最適解を導き出す力を育む。 ③書くことを通じて、自らとの往還を		○1 年生は小学校訪問をはじめとする地域探究を実施。2 年生はフィリピン海外研修に向けた事前学習、3 年生は卒業作品研究に取り組んだ。初めて実施したフィリピン海外研修は、語学学習に加えて社会
	重ねながら学びを深める。 ④大学入試に備えて文章力を身につ		構造や経済構造の矛盾を考えるきっかけとなった。 ○1年生を対象に、特別講師を招いて『文章力講座』を開講し、文章力
	ける。		の向上に努めた。 ○教育探究コースでは、会議での活発な議論をもとに方針を策定し、 海外研修やオープンスクールの実施に至った。
(1) 生徒の学校生活の中心をなす授業の充実を目標に、「授業改善計画」をすすめる。	①「魅力ある授業づくり」を 5 つの観点から進める。	・学校アンケート・生徒からの意見や要望・生徒総会に出された要求・教員面談	・学校アンケートでは、「授業がわかりやすい」は 66.7%(前年度比+5.2%)、「授業中に深く考えたり、意見を述べたりする機会がある」は58.9%(前年度比+2.9%)、「学力がついてきたと実感できる」は61.7%(前年度比+7.0%)と、どの項目も評価が向上している。・各教科・科目における目標およびミニマム基準としての『基本的な知識・能力』の策定を方針に掲げて取り組みを進めてきたが、教科間のばらつきがあった。・進学総合コースでは、遅刻や欠席が多いクラスがあり、授業についていけなくなる要因となっている。・夏期教研で、〈生徒理解を深める文化祭指導の実践報告〉〈充実ノートの教育的意味〉〈並びに ICT を活用した授業実践報告〉等を実施し、教育力向上に努めた。・研究授業は、実施できていない。教科主任会議の定例化や教育実践の紹介、公開授業など、豊かな実践を広げるための組織的な取り組みに課題を残した。・探究コースに一人1台のタブレットを導入して2年となる。ICTを活用したパイロット的な実践を行うことを目指して取り組んだが、夏期
			教研での報告と公開授業にとどまり、大きく進めることができなかった。 ・全教員との管理職面談を 1 学期終了後実施し、授業づくりや「びに向

		W.Harry A.	かう姿勢を育むクラス活動」に関する各教員の工夫や課題について聞き取り、課題意識の醸成に努めた。 ○「学習規律のある教室空間づくり」の課題では、「新入生から 3 年間かけて授業中にスマホを使用しないよう改善していく」という方針を掲げて 2 年目を迎えた。1・2 年生では、成果が見られた。
(3)特別活動を教育活動の中 にしっかりと位置づけ、自治 の力を育む。	・実行委員会等を組織し、生徒中心に行事を運営・行事や生徒会活動で全校集団づくりを推進・月曜放課後の HR 活動活用・家庭学習週間、放課後学習会をクラス活動として展開・生徒会議案書討議の活性化	・学校アンケート	・体育大会・文化祭・卒業式で、実行委員会又は運営委員を組織し、生徒が主体的に関わることができた。 ・体育大会の応援団は、3 年生を中心に結成され、完成度の高い発表を披露した。「充実ノート学習会」も含めて、縦割りの教育力が発揮され、3 年生は最高学年としての自覚を持ち、1・2 年生に対してリーダーシップを示した。また、1・2 年生の間には「来年はあんな先輩になりたい」という目標が芽生えた。 ・文化祭においては、本校独自の「学ぶ文化祭」を実施した。全クラスが
			クラス学習会を、約2/3のクラスが外部講師による講演、フィールドワーク等を積極的に行い、生徒にとって社会的視野を広げる貴重な機会となった。
			・テスト前放課後学習会を、全てのクラスで実施できた。 ・学習意欲向上のきっかけとして 50%を超える生徒が、KG・充実ノート、放課後学習会をあげている。 ・「家庭学習週間」に約 60%以上の生徒が参加することができた。取り組みをクラス活動として展開し、さらに多くの生徒が参加することが課題になっている。 ・HR 活動として位置付けている月曜放課後の時間帯を、十分活用できていないクラスも存在した。 ・生徒総会において、全クラスが学校への施設設備や授業に対する要求を提出し、要求実現運動に取り組めた。 ・「行事は、生徒が楽しく参加できるものになっている」の満足度は75.3%。一方、「生徒会活動やクラス活動は生徒主体のものとなっている」は63.8%となっており、クラス間に大きな差異が見られた。 ・部活動において、「キャプテンや部長を中心に生徒が運営できている」
(4)社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめる。	・生徒の行動の背景を掴みながら指導 ・毎朝の登校立ち番指導 ・放課後の下校立ち番指導 (毎日ではない) ・放課後の地域巡回指導 ・定期的な身だしなみの教化指導 ・学期の最初と考査直前の頭髪指導 ・学期に2,3回の1日玄関指導 ・学期に2,3回の1日玄関指導 ・ 決試前の身だしなみ教化指導 ・ 遅刻、欠席指導での家庭との連携強化 ・スマホの取り扱い・マナーについて、HR等で考えさせる指導 ・食堂におけるマナーの向上に向けて指導 ・生活指導を業務とする常勤講師の雇用(昨年までに引き続き)		とする回答は 63.8%であり、前年度から減少している。生徒の主体性がより発揮されるように推進していく必要がある。 ・副担任業務を明確化し、担任と協力して朝礼・終礼や生活指導面談に取り組むことで成果が見られた。一方で、担任と副担任との連携が難しくなるケースも生じた。 ・頭髪指導については、再登校指導の方針のもと、保護者の協力を得ながら継続的に取り組むことができた。再登校指導の対象者は、毎回数名程度であった。 ・「新入生から 3 年間かけて授業中にスマホを使用しないよう改善していく」方針を掲げ、2 年目を迎えた。1・2 年生の看護科・幼教コース・探究コースでは、成果が見られた。 ・スマートフォンの使用に関しては、その害も含めて、生徒自身に「学習権の保障」という観点から、考えさせる方針を掲げていたが実施には至らなかった。 ・進学総合コースでは、遅刻・欠席者が毎日 10 名以上のクラスが存在し、一人ひとりの生活状況も含めた分析と個別指導が求められる。保護者に対しては、日々の連絡に加えて、月末に遅刻・欠席の状況を通知しているが、さらに密な連携が必要である。
(5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートする。	・支援教育委員会の会議(週1回)の 定例化 ・必要に応じてケース会議を行う。 ・学級担任と養護教諭、スクールカウンセラーが情報を共有し、適切な指導を行う。 ・学年主任は学年の生徒全員を俯瞰し、特に留意すべき生徒について、支援教育委員の情報共有と指導方針の合意を図る。 ・サポートルームを常設する。 ・スーパーバイザーのアドバイスを活かし、適切な指導を行う。 ・外部機関との連携をはかる。	・アンケート結果 ・会議内容 ・学習会実施状況 ・サポートルーム利用 状況	 ・サポートルームの体制を強化し、毎時間、生徒が利用できるように整備を進めた。 ・支援会議を毎週定例化し、学年ごとに課題のある生徒について情報を共有し、指導方針を明確にすることができた。支援が必要な生徒については、スーパーバイザーも加わったケース会議を実施し、対応にあたることができた。また、コース会議や学年会議を充実させ、生徒情報の共有を図ることが出来た。 ・学校アンケートの「悩みがある時に安心して相談できるか」の項目は57.7%であったが、担任による差異が非常に大きかった。第3学期にアンケート結果を全担任に返却し、改善の機会を設けるとともに、結果が芳しくなかった担任に対しては面談を実施し、振り返りを促した。 ・生徒の問題行動に対して、身体接触を伴う不適切な指導が行われた事例があり、職員会議においてガイドラインに基づいた生徒指導の在り方を再確認した。支援が必要な生徒については、1・2年においてケース会議が頻繁に実施され、具体的な指導に活用された。

	(6) 生徒の発達の可能性を信じ、諦めない指導を続け、 転退学者を減らしていく。	・生徒に寄り添う丁寧な指導 ・保護者との日常的な共同 ・転退学者率を 5%以内にする ・経験の浅い教員をサポート体制	·学籍異動率	 ・昨年度と比較し、専攻科を含む 1~5 年生の学籍異動率は、5.38% (昨年度 4.3%)、高校 1~3 年生は 5.08%(昨年度 4.6%)と昨年よりも増えている。 ・学籍異動率が 5%を超過した要因の一つとして、単位制・通信制への進学傾向の拡大が挙げられる。安易な転退学に至る生徒に対して、個別に寄り添った指導と学習意欲の向上を図る支援が不可欠である。例年に比べて専攻科での学籍異動が多かった背景には、高校 3年間を通じての看護観の醸成や志が十分に育まれなかったことが影響していると考えられる。 ・心の悩みを抱えた生徒や教室に入りにくい生徒対しては、支援員を中心としたサポートルーム体制を充実させることで対応した。 ・副担任制を樹立し、担任をサポートするシステムを構築した。
	系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の 進路決定をできるようにする。	・学年に応じたキャリア教育の推進 ・基礎学力の定着及び学力の向上 ・生徒全員の進路決定 ・看護医療系進学希望者の個別指導 による実力養成 ・英検、漢検などの各種検定試験で の資格取得	• 進路状況 • 資格検定者数	事攻科 61(60) 大学 13(14)
[3]五年一貫看護科課程の完成	基礎的な理論・技術を身につけ、患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護の心を養う。	・命と向き合う専門職としての自覚を育成する。 ・高校3年間の基礎学力の向上のために学習する習慣を過半数が身につける。 ・臨地実習での指導者・患者からの学んだことを報告できる。 ・チーム責任を果たすためのグループ学習を増やし、全員がリーダーとしての経験を積めるようにする。 ・看護専攻科における就職活動、臨地実習と国家試験対策の両立・就職率100% ・国家試験合格、既卒生を含め100%		 ・命と向き合う責任の重さを自覚させるため、1 年時に病院見学を行った。忙しく働く看護師の姿を通して、働きがいやその大変さなど、多くのことを学ぶ機会となった。 ・2 年生の戴帽式では、一人ひとりが看護師になる決意を改めて固めることができた。 ・学習習慣の定着を図るために教科から課題を出しているが、「やらねばならない宿題」として受け止められ、主体的・積極的な学びへとつながっていない。 ・授業の分かりやすさは 1 年次で 72%、3 年次で 52%、意見が言える授業は 1 年次で 73%、3 年次では 26%と、学習量の増加に伴い、生徒の積極的な参加が減少し、受け身の学び方へと傾いている。難しくなっていく学習内容に対し、教科指導を工夫することが、生徒の視野を挟め、想像力の伸長を妨げることにつながっていると考えられる。 ・高校 3 年間では、実習報告会を通じて自らの学びや気づきを発言する力が育まれている。一方で、報告が評価目的にとどまり、質問が少なく、他者から学ぶ姿勢の育成が課題となっている。 ・高校文化祭には自治会として参加する方針を掲げ、4 年生が模擬店の企画・仕入れ・販売促進を自主的に行い、成功を収めた。予想以上の販売結果が得られ、協力・共同して取り組む良い機会となった。 ・4 年生では、例年にない 12%の退争者が出た。高校 3 年間とは異なる専門領域の厳しい学問に適応できず方向転換したが、看護の楽しさを十分に実感させられなかった点は、指導上の課題である。 ・5 年生は、すべての領域実習に取り組む中で、リーダーを中心にグループで考え合い、互いに学び合えるよう成長した。実習を通じて、知識が定着していく実感も得られた。 ・5 年生の研究発表では、患者との向き合い方や、看護の難しさと患者尊重のバランスについて考察し、自らの看護を振り返る機会となった。自己を見つめ、強みや弱みを認識する力につながり、多くの質問も出され、他者から積極的に学ぶ姿勢も見られた。 ・1 国家試験の合格率は、既卒者を含めて99%、現役生は93.1%であった。集団的な学びにより下位層の底上げが図られたが、12 月時点で試験対策が遅れている生徒の学習意欲を十分に高められなかった点は、次年度への課題である。 ・実習・授業と両立しながら就職活動を行い、自分の看護観を大切にして病院を選んだ結果、100%の就職を決めることができた。

4	地域の諸組織との連携を強め	・敬老会の協力を得た看護科「老年	·参加回数	○幼児教育コースの生徒が意欲的に地域の取り組みに参加した。
地	る	看護」実習の実施	・参加生徒の声、地域	・〈8月〉天王寺動物園「こども遊びコーナー」
域		·地域全育成会、防災訓練、文化行	団体からの意見	・〈9月〉子ども食堂「おかえり」ボランティア (豊中市)
ح		事、美化活動への参加		・〈9月〉NPO法人「ぬくもり」(河内長野市)
の		・敬老会への慰問ボランティア		・〈9月〉松原商工会会議所主催「こども商店街 in まつばら」
携		・地域中学校の部活大会の開催		○看護科・クラブが地域の取り組みに積極的に参加した。
連				・〈8月〉松ヶ丘連合自治会で災害看護講習 看護科
				・〈8月〉「楠小学校区防災訓練」看護科
				・〈11 月〉「千代田バラエティフェスタ」吹奏楽部、軽音楽部
				・〈11 月〉「千代田美化キャンペーン」ボランティア部
				・〈11 月〉「近つ飛鳥古墳コンサート」吹奏楽部
				・〈11 月〉「南海電車祭り」吹奏楽部
				・〈6・11・2 月〉「あいあい活動」ボランティア部、軽音楽部、アルティメ
				ット部
				・〈12 月〉「楠小学校区防災訓練」看護科
				・〈12月〉「千代田中学校「お点前訪問」茶道部
				・〈2月〉「貴望ヶ丘自治会新年会」茶道部
	クラブ員を増やし、高校教育	・外部指導者の招聘	・クラブ活動内容	・バドミントン部、空手部、バレー部、ダンス部、吹奏楽部、イラスト部、
5	の目的に沿った部活動を進め	・クラブ顧問会議での活動交流	・クラブ顧問会議の活	茶道部で外部指導者を招聘し、専門的な指導を受けることができる
部	る	・クラブ活動の目標の明確化	動報告	ようにした。
活		・「クラブ活動のあり方に関する方針」		・生徒が休養と学びのバランスが取れた高校生活を送ることができるよ
動		に沿った活動		う、昨年度に作成した「部活動に関する活動方針」に基づき、部活動
				の運営を行った。
				・8 月に「能登半島地震スタディーツアー」を実施し、41 名の生徒が参
				加した。生徒の社会的関心や学びの動機づけを高める有意義な機
				会となった。
				・「顧問の先生やコーチの指導に満足している」が 63.5%、「キャプテン
				や部長中心に生徒が運営できている」が 78.3%である。生徒中心
				の運営をおこなうことは、高校教育における部活動の目的そのもの
				に関わるものである。「クラブ活動のあり方に関する方針」に沿って
				部活動の目標を明確にして指導していく必要がある。